

アクティブ・ラーニング実践シート

▼本資料は、古典教材に即したアクティブ・ラーニング実践のためのワークシートである。当該の教材を授業で扱うにあたり、効果的なアクティブ・ラーニングが行えるような工夫を盛り込んだ。本資料の活用を通じて、実践的な授業を展開するためのヒントにされたい。

【教材名】『小倉百人一首』の注釈を読む」

【課題】（省略）

『小倉百人一首』の注釈を読む』での課題について、ステップを踏んで学習していくためのワークシートとして位置づけている。

・構成と使い方

シート1／「紅葉踏み分け」の解釈…実際の課題に入る前に、まずは教科書で解説されている内容を整理する作業を行うと、ウォーミングアップにもなる。

シート2／課題1①・②…課題1で取り上げられている文章について、簡潔に整理する。

シート3／課題1③…自分の考えをまとめるにあたり、どういうアプローチがあるか調べる観点をいくつか示唆しておいた。ただし、解釈に正解はないので、ここに挙げた観点にとらわれる必要はなく、多種多様なアプローチがあることに気づかせたい。

シート4／課題2①…課題2で取り上げられている歌には、表面上の意味と裏に隠されている意味の二つの意味があるため、まずはそれらを整理し、確認する作業を行う。

シート5・6／課題2②／2③…課題2の『異見』の文章は、『改観』や『初学』の文章を引用しつつ、それらに対する批判を述べるといふ形を取っている。そのため、まずは『改観』や『初学』の主張の内容を押さえた上で、それに対して『異見』がどう批判を加えているのかを、順に追っていく必要がある。課題2では、引用部分と批判部分をしっかりと区別することが重要。

※発展的な活動として、元の『改観』や『初学』の文章に戻って内容を確認してみてもよい。『異見』での引用の仕方が適切かどうかといった視点も生まれ、古典におけるメディアリテラシーの育成も期待できる。

シート7／課題2④…自分の解釈について、そう判断した根拠を挙げたり、『異見』『改観』『初学』などの主張について自分はどう判断したかという視点を入れたりできるとよい。

シート8／課題3…課題3では、調べ学習を複数で分担したり、各自の解釈を交流して読みを深めたりすることも、主体的・対話的で深い学びの実現に有効と思われる。

【ジグソー法による授業展開】この課題では、次のような方法によるグループ活動も効果的である。

- ① クラス全体を6名ずつのグループ（ホームグループ）に分け、グループ内で誰がどの歌について調べるか担当を決める。（クラスの人数によって、グループの数や人数は調整する。）
- ② 同じ歌を担当した者どうしが集まり、グループ（エキスパートグループ）を編成する。
- ③ エキスパートグループで、担当した歌について参考図書などを調べ、グループとしての解釈をまとめる。
- ④ ホームグループに戻り、各自がそれぞれのエキスパートグループで調べた内容や、歌の解釈について報告し合う。

シート／作業用・調査メモ…古語辞典や参考図書などで調べたことなどをメモしておくためのシート。ノート代わりに
ト代わりに適宜使用する。

シート／作業用・資料貼り付けシート…図書のコピーなどを貼り付けておくためのシート。ノート代わりに
適宜使用する。

※シート1～8については記入例を示した。

『小倉百人一首』の注釈を読む①

年 組 番 名前

【「紅葉踏み分け」の解釈】

教科書に紹介されている「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋はかなしき」について、三つの文章における、それぞれの主張を分かりやすくまとめよう。

問題点 〔

「注釈書名」

「紅葉踏み分け」たのはどちらか

〕

「筆者の主張」

サンプル

『小倉百人一首』の注釈を読む①

年 組 番 名前

【「紅葉踏み分け」の解釈】

教科書に紹介されている「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋はかなしき」について、三つの文章における、それぞれの主張を分かりやすくまとめよう。

問題点 「紅葉踏み分け」たのは、鹿か人かということ

【注釈書名】

【「紅葉踏み分け」たのはどちらか】

百人一首改観抄

どちらとも考えられる

【筆者の主張】「紅葉踏み分け」たのは一般的には鹿と考えられる。

しかし、菅原道真のこの歌に関する漢詩に、「勝地尋ね来たりて」という言葉があり、それによれば、人が踏み分けたのかもしれない。鹿でも人でもどちらでも当てはまる。

宇比麻奈備

鹿

鹿が踏み分けたと考えるのが、歌の文脈において穏当である。

百首異見

鹿

人が踏み分けたと考えるのであれば、「奥山の」となっていなければならない。「奥山に」となっていることから、「紅葉踏み分け」が「鹿」についてのことであることは、まったく紛れようがないことである。

『小倉百人一首』の注釈を読む②

年 組 番 名前

【課題1・①・②】

課題1について、①共通して問題点となっていることはどのようなことかを書き、②その問題点について、それぞれの文章の筆者が主張していることを、分かりやすくまとめよう。

問題点 「この歌の時節は秋の末（晩秋）かどうかということ」

〔注釈書名〕

百人一首改観抄

〔筆者の主張〕「紅葉踏み分け」というのは、秋が更けきつての落葉ではない。木の葉は山の奥深い所から色付き始めて、人里に近い低山は後で色付くものであるうえに、山では秋の訪れとともに一枚ずつ散った葉が積もるのである。

宇比麻奈備

「奥山」という言葉があることによって、紅葉が早い頃か遅い頃かということまで言うのはこだわりすぎである。

百首異見

「声聞く時ぞ」という「時」は、鹿の鳴き声が聞こえる「時」を指すのであって、一般的な時節をいっているのではない。「紅葉踏み分け」とあることによって、時節が早い頃か遅い頃かということ論じるのは、こだわりすぎである。

『小倉百人一首』の注釈を読む③

年 組 番 名前

【課題 1・③】

課題1で問題点となっていることについて、自分はどうか考えるか、根拠を明らかにしてまとめよう。

○自分の考えをまとめるうえで、次のような点について調べ、参考にしてもよい。

- ・現代の百人一首の注釈書や解説書類では、この歌をどのように解釈・解説しているか。
- ・「奥山に…」の歌は『古今和歌集』に採られているが、この歌はどのような位置に置かれているか。
- ・「奥山」「紅葉」「鹿」などが詠まれた和歌には、ほかにどのようなものがあるか。

『小倉百人一首』の注釈を読む③

年 組 番 名前

【課題1・③】

課題1で問題点となっていることについて、自分はどうか考えるか、根拠を明らかにしてまとめよう。

○自分の考えをまとめるうえで、次のような点について調べ、参考にしてもよい。

- ・現代の百人一首の注釈書や解説書類では、この歌をどのように解釈・解説しているか。
- ・「奥山に…」の歌は『古今和歌集』に採られているが、この歌はどのような位置に置かれているか。
- ・「奥山」「紅葉」「鹿」などが詠まれた和歌には、ほかにどのようなものがあるか。

『古今和歌集』では、この歌は秋歌上の中盤より少し後に置かれている。「紅葉」は、普通は晩秋の景物だが、四季の歌は季節の推移に従って配列されていること、この歌の後に「萩」と「鳴く鹿」を詠んだ歌が三首続いていることから、この「紅葉」は楓の紅葉ではなく、萩の「黄葉」であり、中秋頃の歌と捉えられているようである。

しかし、藤原定家が編んだ秀歌選の『八代抄』では、この歌は秋歌下の、晩秋の鹿の歌群の中に置かれている。定家はこの歌を晩秋と捉え、配列を変更したということになる。

古語辞典等によれば、この歌については、作者が猿丸大夫ということも怪しいらしく、この歌が詠まれた時の実際の情景がどうだったかではなく、自分自身はこの歌からどういう情景を感じ取ったか、ということを考えてみる。

『古今集』を踏まえれば「もみぢ」は萩ということになるが、これが萩だとすると、「紅葉踏み分け」という語句に違和感が残る。植物図鑑等によれば、種類にもよるが萩は二メートル程度の低木で、その中を歩く鹿（もしくは人）を想定すると、「踏み分け」というより「掻き分け」というイメージになる。この「紅葉踏み分け」という語句を素直に読めば、奥深い山の中、地面に散り敷く赤く色付いた紅葉を踏み分けつつ歩く鹿（もしくは人）が情景として思い描かれる。「紅葉踏み分け」という語句によって晩秋という時節が前面に出てくるからこそ、雌鹿を慕う切ない鹿の鳴き声が重なり、「秋は悲しき」という情感が生まれるのではないか。

なお、「萩」と「鹿」はよくセットで歌に詠まれているが、『万葉集』や『古今集』の歌を見た限り、「萩」と「鹿」の組み合わせが必ずしも秋の寂寥感につながっているわけでもなさそうである。

以上のような点から、この「紅葉」は楓の紅葉と見て、「奥山」「鳴く鹿」という言葉を組み合わせ、晩秋の寂寥感を浮かび上がらせたところにこの歌の特徴があると考え、この歌の時節は晩秋であると解釈する。

『小倉百人一首』の注釈を読む④

年 組 番 名前

【課題2-①】

「めぐりあひて…」の歌を書き写そう。

この歌の詞書の部分を現代語訳しよう。

課題2の文を読み、Aに書かれている内容を整理しよう。

① Aの文から、「めぐりあひて…」の歌の表面上の意味が書かれている部分を書き抜こう。

② 書き抜いた部分について、どういう意味なのかをまとめよう。

③ Aの文から、「下の心」が書かれている部分を書き抜こう。

④ 書き抜いた部分について、どういう意味なのかをまとめよう。

『小倉百人一首』の注釈を読む④

年 組 番 名前

【課題2-①】

「めぐりあひて…」の歌を書き写そう。

めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな

この歌の詞書の部分を現代語訳しよう。

早くから幼友達でありました人で、数年を経て行き会った人が、ほんのわずかな間いただけで、七月十日頃、月と競うようにして帰りましたので

課題2の文を読み、Aに書かれている内容を整理しよう。

① Aの文から、「めぐりあひて…」の歌の表面上の意味が書かれている部分を書き抜こう。

夜渡る月の、再び空にめぐりあひて、かの見し影か、それかともわかぬ間に、また雲がくれし
て入りにしかな

② 書き抜いた部分について、どういう意味なのかをまとめよう。

月が再び空に巡り会った（月が姿を現した）が、以前に見た月の光が見分けないうちに、雲隠れして沈んでしまったことだ。

③ Aの文から、「下の心」が書かれている部分を書き抜こう。

年ごろ経てたまたま行きあひて、昔見しや、その人ともいまだ思ひわかぬばかりなるに、やがて今宵しも出で行く（らん本意なさを、折からの月に寄せていひ出でしなり）。

④ 書き抜いた部分について、どういう意味なのかをまとめよう。

幼友達と久しぶりにたまたま会い、昔見たその人かどうか見分ける間もなく、すぐに今宵のうちに出て行く（という残念な気持ちを、折からの月に寄せて言い出したのである）。

『小倉百人一首』の注釈を読む⑤

年 組 番 名前

【課題2-②】

課題2の文を読み、Bに書かれている内容を整理しよう。

① Bの文に引用されている『改観』の解釈の部分を現代語訳しよう。

② 『改観』の解釈に沿って、その解釈がはっきり分かるように適宜言葉を補い、「めぐりあひて…」の歌を現代語訳しよう。

③ 本文から、景樹の『改観』の解釈に対する批判が端的に述べられた一文を抜き出し、現代語訳しよう。

「本文」

「現代語訳」

④ 景樹がその根拠として挙げている二つの点についてまとめよう。

『小倉百人一首』の注釈を読む⑤

年 組 番 名前

【課題2-②】

課題2の文を読み、Bに書かれている内容を整理しよう。

① Bの文に引用されている『改観』の解釈の部分を現代語訳しよう。

わずかな間の対面で別れたので、あれは昔見た人か、そうでないかと思定めることもできないという趣旨

② 『改観』の解釈に沿って、その解釈がはっきり分かるように適宜言葉を補い、「めぐりあひて…」の歌を現代語訳しよう。

幼友達と久しぶりに会ったが、わずかな間の対面であったので、昔会った人かどうか見定めないうちに（夜半にすぐに隠れてしまった月のように）、別れてしまったことだ。

③ 本文から、景樹の『改観』の解釈に対する批判が端的に述べられた一文を抜き出し、現代語訳しよう。

「本文」しかあひもあへず別れたるにあらず。

「現代語訳」 そのように満足に会えなくて分かれたのではない。

④ 景樹がその根拠として挙げている二つの点についてまとめよう。

『新古今和歌集』にある詞書の「行きあひたる」は、巡り会ったことを指し、歌の本文に「めぐりあひて」という言葉を使ったため、詞書では表現を少し変えただけである。しかし『改観』はこの「行きあひたる」を、どこかにいく途中などで思いがけなく行き会ったように理解し、「わずかな間の対面」だと誤って解釈している。

『新古今和歌集』の詞書に、「年ごろ経て行きあひたる」とあり、そうした後に「七月十日ごろ：帰り侍りければ」ということが書かれているので、少しの日は滞在していたと見るべきであり、「わずかな間の対面」と言うのは誤りである。（「見しやそれともわかぬ間に」という言葉は、再び親しむ間もなくまた別れてしまうことをはかなく思った気持ちの表れである。）

『小倉百人一首』の注釈を読む⑥

年 組 番 名前

【課題2-③】

課題2の文を読み、Cに書かれている内容を整理しよう。

①Cの文に引用されている『初学』の解釈の部分を現代語訳しよう。

②『初学』の解釈に沿って、その解釈がはっきり分かるように適宜言葉を補い、「めぐりあひて…」の歌を現代語訳しよう。

③『初学』の解釈を景樹はどのように批判しているかまとめよう。

『異見』『改観』『初学』で解釈が異なったのはどういう点か。異なった二つの点について、簡潔にまとめよう。

一点目

二点目

『小倉百人一首』の注釈を読む⑥

年 組 番 名前

【課題2-③】

課題2の文を読み、Cに書かれている内容を整理しよう。

①Cの文に引用されている『初学』の解釈の部分を現代語訳しよう。

「見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし」ということを考え合わせると、雲間を渡っていく月とともにそのまま見失ってしまったのを、「月に競ひて」とたとえて表現したのであろう

②『初学』の解釈に沿って、その解釈がはっきり分かるように適宜言葉を補い、「めぐりあひて…」の歌を現代語訳しよう。

幼友達と久しぶりに会ったが、昔会った人かどうか見定めないうちに、雲間を行く月が雲に隠れるとともにそのまま見失って（別れて）しまったことだ。

③『初学』の解釈を景樹はどのように批判しているかまとめよう。

「雲がくれにし夜半の月」とは、十日頃の月が夜中に沈むことからそう言っているのであって、「雲」にさほど意味はない。幼友達との再会を、雲間の月になぞらえて解釈するのは、わずかな時間しか会えなかったと解することから生じた誤りである。

『異見』『改観』『初学』で解釈が異なったのはどういう点か。異なった二つの点について、簡潔にまとめよう。

一点目

友達と再会してから別れるまでの時間が、わずかの間であったか、またはある程度の間があったかという点。

二点目

「雲がくれにし夜半の月」とは、月が単に雲に隠れたことを指しているのか、月が沈んだことを指しているのかという点。

『小倉百人一首』の注釈を読む⑦

年 組 番 名前

【課題2-④】

自分自身は「めぐりあひて…」の歌をどう解釈するかまとめよう。その際、『異見』、『改観』、『初学』で解釈が異なった部分について、自分はどうか考えるのか、根拠を明らかにして説明しよう。

サンプル

『小倉百人一首』の注釈を読む⑦

年 組 番 名前

【課題2-④】

自分自身は「めぐりあひて…」の歌をどう解釈するかまとめよう。その際、『異見』、『改観』、『初学』で解釈が異なった部分について、自分はどうか考えるのか、根拠を明らかにして説明しよう。

この歌は、久しぶりに巡り会った幼友達とわずかな時間会って、すぐに別れてしまった歌だと解釈した。つまり、長くは一緒にいなかったという認識であり、その点は『改観』や『初学』と同じ考え方である。そう考える根拠は、詞書にある「ほのかにて」という言葉である。「ほのかにて」は「わずかだ」とか「ほんの少しだ」という意味であるが、数日一緒にいたのであれば、やはりこのニュアンスはなかなか出ないと考えた。

もともと、幼友達が雲間を渡る月とともに去って行ったとする『初学』の主張については、単に友達を月になぞらえただけで、「月とともに」とまでは言えないと考える。『異見』は『初学』の主張を、幼友達とわずかな時間しか一緒にいらなかったと考えるがゆえの誤りと主張しているが、一緒にいた時間がわずかだったかどうかということ、月とともに去っていったかどうかということは別の問題として考えるべきであろう。

注釈書類で解釈が異なるもう一つの点として、「雲隠れにし夜半の月」を、月が単に雲に隠れただけと取るか、月が沈んだと取るかということがある。

『異見』は、二人が別れたのが七月十日頃であったことと、十日頃の月が真夜中には沈んでしまう（隠れてしまう）ことを取り立てて重ね合わせ、月が沈んだ、と解釈したのである。しかしこれについては、現代の一般的な古語辞典類を見る限り、「雲隠る」という動詞が「(月が)沈む」意まで含んでいるとは言えないことから、歌の言葉を素直に読み解き、単に月が雲に隠れただけであると解釈すべきだと考える。

『小倉百人一首』の注釈を読む⑧

年 組 番 名前

【課題3】

課題3について、調べたい歌を書き抜こう。(教科書に挙げられている以外の歌でもよい。)

ちはやぶる神代も聞かず竜田川から紅に水くくるとは

まずは、自分なりにその歌を現代語訳してみよう。

神の時代にも聞いたことがない。竜田川に真つ赤な紅葉が散り落ち、その紅の下を水がくぐっていくとは。

古語辞典や参考図書などを調べ、どういふ点について解釈の違いがあるのか整理しよう。

「水くくる」という語句について、「水潜(くぐ)る」と濁音に読んで紅葉の下をくぐって水が流れるとする解釈と、水をくくり染め(絞り染め)にするとする解釈の二つがある。

解釈の違いを踏まえた上で、自分はどう解釈するのか、根拠を明らかにして説明しよう。

参考図書などを幾つか読み、改めてこの歌について考えた結果、最初の解釈とは異なるが、「水をくくり染めにする」という解釈を採りたい。

紅葉の下を水が潜ると考えると、川一面に紅葉が敷きつめられて真つ赤になっている情景が浮かぶ。一方、水をくくり染めにすると考えたと、隙間もありつつ川面に紅葉がはらはらと散り浮かんでいる情景が浮かぶ。解釈の違いによって、イメージされる情景も異なってくる。

この歌は『古今和歌集』に採られており、そこでは「二条の後の春宮の御息所と申しける時に、御屏風に竜田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にてよめる」という詞書が付けられている。屏風に描かれた竜田川というとき、やはり川全体が真つ赤になっている絵柄は想像しづらいというのが理由の一つである。その他の理由としては、「神代も聞かず」という語句に着目したとき「水をくくり染めにする」という発想の方がより意外性があつてぴたりとくるということも挙げられる。ただし、いずれの理由も感覚的なものであるので、明確な根拠という点では弱いかもしれない。

なお、『小倉百人一首』の撰者の藤原定家は「水潜る」という理解であつたらしいということである。

『小倉百人一首』の注釈を読む

年 組 番 名前

【作業用・調査メモ】

※何で調べたのか必ず出典を明示する。図書資料の場合は書名・著者名・出版社・発行年等を書く。インターネットの場合はサイト名とURLを書いておく。

サンプル

『小倉百人一首』の注釈を読む

年 組 番 名前

【作業用・資料貼り付けシート】

※資料は必ず出所が分かるようにしておく。図書資料の場合は書名・出版社・発行年等を書くか、奥付のコピーと一緒に貼るとよい。インターネットの場合はサイト名とURLを書いておく。

サンプル